

黙示録1章9-20節 「栄光のイエス・キリスト」

1A 教会に対する現れ 9-11

1B イエスにある苦難 9

2B 主の日への幻 10

3B 七つの教会 11

2A 人の子の現れ 12-16

1B 祭司なる王 12-14

2B 裁き主 15-16

3A 生きておられる主 17-20

1B 死に打ち勝たれた方 17-18

2B 三つの書き記すこと 19

3B 主の御手にある教会 20

アウトライン

黙示録 1 章を開いてください。私たちは、前回 8 節まで見てきました。ヨハネは、これがアジアにある七つの教会に対する手紙であることを伝えています。アジアにある七つの教会に対して、三位一体の神が伝えておられることばです。その中でも、イエス・キリストご自身が中心になっており、この方が再び戻って来られることを語っておられます。そして、この方がアルファであり、オメガであること。つまり、すべてを支配しておられる方で、全能者であられることでしめくられています。私たちがいかに、世の終わりに生きる時に、私たちの主イエスがすべてを支配していることを知るのには、とても必要なことです。

1A 教会に対する現れ 9-11

そして、主イエス様は、ヨハネ個人にご自身の栄光の姿を現されます。ご自身の栄光の姿を現し、それから七つの教会に対して、語るべきことがあると言われます。今日学ぶことは、栄光のイエス様が、教会に対して現れるということです。世に対してご自分の力と威光を現されるのですが、今、教会に対して現されて行きます。

1B イエスにある苦難 9

⁹ 私ヨハネは、あなたがたの兄弟で、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者であり、神のことばとイエスの証しのゆえに、パトモスという島にいた。

ここにヨハネのへりくだりと、心の暖かさが伝わってきます。「あなたがたの兄弟で」と言っています。そして、「あなたがたとともに」と言っています。彼は、教会の人々と自分を切り離すことを考え

ず、彼らが通っている苦難、教会として通っている苦難が、キリストの体として自分の苦難でもあるという、共同体、切っても切り離せない見方をしていました。そして彼は、十二使徒の一人で、老齢の、イエス様に直に触れた生き残りの証人です。ここから、人間的には変な権威が付けられても全くおかしくありません。人々が彼を祭り上げるでしょうし、そして本人も自分は霊的に他の人々より高いと思うでしょう。しかし彼は、兄弟とっていました。

そして、「イエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者」と言っています。今日の箇所は、すでにダニエルの預言が色濃く反映されています。ダニエルの預言の中に、聖徒たちは苦しみを経る。そこに忍耐が必要だ。しかし、最後には神の永遠の御国を受け継ぐのだというものです。御国を熱心に待ち望む者たちの中には苦難があります。イエス様は十字架に付けられる前に弟子たちに、「世にあっては患難があります。(ヨハネ 16:33)」と言われました。そしてこの時、キリスト教会は、皇帝ドミティアヌスによる迫害の波の中にいました。パウロは、リステラで人々から石を投げられて、死んだように見られる程になりましたが、立ち上がった後に町に戻りました。そしてピリピの人々に「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない(使徒 14:22)」と言いました。私たちがキリストの中に生きる時、共同体としての呻きを経験します。

そして、「神のことばとイエスの証しのゆえに、パトモスという島にいた」と言っています。政治的な理由でもなく、神のことばを伝え、イエスの証しをしている中で、パトモス島にいました。他の十二使徒と違って、彼は殉教しませんでした。初代教父による伝承によりますと、彼は煮えたぎった油の大釜の中に入れられました。ところが奇跡的が起きました。それでも死ななかったのです。それでパトモス島に島流しになって鉱山で強制労働をさせられていたと言われています。

そしてパトモス島は、小アジアのエペソから約 50 キロ沖にある島ですが、今はギリシャに属しています。今でこそ、開発が進み、観光地となっていますが、当時は茨と岩の島でした。独自の水源はなく、食糧も乏しく、日差しの強い厳しい所でした。おそらく強烈な孤独感と無力感の中に彼はいたことでしょう。しかし、ここにあるように自分がここにいるのは、神のみことばとイエスの証しのため、また他の兄弟たちと共に苦しみ、御国を待ち望み、忍耐しているのだということを知っていました。そんな時に、神々しい幻を見るのです。

2B 主の日への幻 10

¹⁰ 私は主の日に御霊に捕らえられ、私のうしろにラツパのような大きな声を聞いた。

彼は「御霊に捕らえられ」ました。圧倒的な、抗うことのできない御霊の力が彼に臨みました。これは、預言者エゼキエルがすでに経験していたことです。霊が彼の中に入って、他のところに引張られていったり、また霊が入って、立ち上がったりしました。そして、御霊によってエルサレムまで連れていかれ、神殿の中で人々が偶像礼拝をしている姿も見たのです。

そして、それが「主の日に」にあったとあります。これは、主の日に臨んで、というような意味合いです。主の日というと、日曜日のことだと思える人もいます。確かに、新約聖書には、聖霊が降ったのが五旬節の満ちた日、日曜日であったし、また主が甦られたのは安息日の明けた次の日、日曜日でした。そして、彼らが集まってパンを裂いたのが、「週の初めの日(使徒 20:7、1コリント 16:2)」であることが書かれています。しかし、旧約聖書には、例外なく主の日とは「神が地上に怒りを下し、ご自分の正義と平和を地上に確立される日」として描かれています。例えば、ヨエルの預言にはこう書いてあります。「1:15 ああ、その日よ。【主】の日は近い。全能者による破壊の日として、その日は来る。」そして新約聖書でも、「主の日」という言葉は、その意味での言葉、終わりの日のことを話しています。(1コリ 5:5、1テサ 5:2、2テサ 2:2-3、2ペテ 3:10)そして、これは、黙示録全体を読めば終わりの日のことを指していることは明らかです。これから、主の日が来ることを告げているのが黙示録だからです。

ですから、ヨハネが、終わりの日、主の日の幻の中に御霊によって捕えられたと考えていいです。

その証拠に、「ラツパのような大きな声を聞いた」と言っています。これは、終わりの日に主が出される声として、出てくるものです。元々は、主が天から降りてこられて、その聖さ、また栄光と威光の力を示されたのは、シナイ山においてでありましたが、「出 19:16 三日目の朝、雷鳴と稲妻と厚い雲が山の上にあって、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。」とあります。そしてラツパの音は、民を招集する時や戦いに臨む時にも、吹かれます。そこで新約聖書では、主が天から降りて来られる時、私たちが空中に引き上げられる時に聞こえるものです(1コリ 15:52、1テサ 4:16)。そして黙示録では、何度となく、ラツパが吹き鳴らされる場面が出てきます(4:1;8:2,7,8,10,12;9:1,13;11:15)。

3B 七つの教会 11

¹¹ その声はこう言った。「あなたが見たことを巻物に記して、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキアに送りなさい。」

前回お話したように、主が書き記しなさいと命じられたのは、七つの教会に対するものでした。地図で見ると、エペソから始まり、時計回りで三角形の形をして順番に並んでいます。これらの町の多くが、かなり大きな都市であり、ローマ街道の交通網も発達していました。ですから、ヨハネの書き記した黙示録の回覧は速やかに行われたことでしょう。そして「七」という数字は、神の完全数を示すことも、この前お話ししました。その地域教会にある問題に対して主は語られていると同時に、諸教会に対して、全世界の教会に対しての主のことばであることがわかります。

2A 人の子の現れ 12-16

1B 祭司なる王 12-14

¹² 私は、自分に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。

¹³ また、その燭台の真ん中に、人の子のような方が見えた。その方は、足まで垂れた衣をまとい、胸に金の帯を締めていた。

主イエスご自身の神々しいお姿です。ヨハネが今、御霊によって主の日の幻の中に導かれているのですが、彼にとってこれが初めての経験ではありません。高い山に連れて行かれた時も、そうでした。主は、高い山にペテロとヨハネとヤコブを連れて、そこで神々しい姿をお見せになります。「17:2 すると、弟子たちの目の前でその御姿が変わった。顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。」これが、天の御座におかれる御子の姿、その栄光であります。イエス様は、十字架に付けられる直前、御父に対して、「ヨハネ 17:5 父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。」と祈られました。その栄光です。世界が存在する前からあった栄光ですから、シナイ山において天から降りてこられた時の栄光にも主の栄光がありましたし、そして御国が到来する時に王の王、主の主として現す栄光でもあります。イエス様は、天地万物の神、王たる方の御子ご自身なのです！

まず主は、七つの教会を「七つの金の燭台」としてお見せになっています。燭台は、幕屋や神殿において祭司たちが仕える聖所において、その中を照らす重要な役割を担っています。黙示録では、天においてそこが、地上の幕屋にある祭壇や香壇などが出てきます。同じように、今、金の燭台が現れています。聖所に光を燭台が与えたように、イエスご自身がその光の真ん中におられるということです。教会が世の光であり、その光はイエス様が真ん中におられることによって可能であります。そして、教会は、神に対して祭司であり、この地上に祭司として立たせられているのです。

そして主は、その「真ん中」におられます。迫害を受けている教会、この世から圧迫を受けている教会にとってなんという慰めでしょうか！この世においては阻害されている教会の中に、それでも主は真ん中におられます。また、生ぬるくなっている教会にとっては、主が真ん中におられるということは警告ですね。主の声を聞いて、主を恐れ、悔い改め、主に従わないといけません。

主は、ご自身を「人の子のような方」として現しておられます。ここがダニエルの預言からのものであります。「ダニエル 7:13-14 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」イエス様も大祭司カヤパの前で、そのことを告白されました。御父から裁きを行なう権威を与えられ、そして主権と力、光栄をもって御国を立てられることを、この「人の子」の称号には含まれます。

そしてダニエル書 10 章において、主の使いである方がダニエルに現れました。そのお姿と、ここでヨハネに現れておられるイエス様の姿がほとんど同じになっています。ですから、ダニエルの預言があってこそそのヨハネの預言であります。ダニエル書 10 章には、この方が現れ、他の御使いたちも現れ、そして神に敵対するペリシアの君、ギリシアの君がいるが、ミカエルだけがイスラエルのために戦う。そうした中で、大きな戦についての幻が、真理の書として与えられました。主がこれから、ダニエルには、終わりの日まで封じられていたと呼ばれる書物が、今、ここで開かれているのだということを示しているのです。

それからイエス様がどのような姿かをヨハネは、書き記しています。「足まで垂れた衣をまとい、胸に金の帯を締めていた。」とあります。私たちを主は、祭司として召してくださいましたが、主ご自身は私たちに取って偉大な大祭司です。足にまで垂れた衣は、祭司的な姿を現しています。大祭司の装束を思い出させるものです。しかし、胸には金の帯が締めてあります。これは王の輝きを示しているのでしょう。王であられ、そして祭司であられる姿です。その威光に満ちた姿が、詩篇 93 篇に証しされています。「93:1 【主】こそ王です。威光をまとっておられます。【主】はまとっておられます。力を帯とされます。まことに世界は堅く据えられ揺るぎません。」

¹⁴ その頭と髪は白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は燃える炎のようであった。

主の真っ白な頭髪は、全く汚れたところのない、聖なる姿を表しています。「ダニ 7:9 私が見てみると、やがていくつかの御座が備えられ、『年を経た方』が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭髪は混じりけのない羊の毛のよう。」とありますが、神の姿ですが、年を経たとあるので、この髪が年老いて白髪なのか、と誤ってしまいますがそうではなく、永久まで生きられる方が、全く純潔な方であられる、ということです。そして「その目は燃える炎」とあります。これは、全てのことを見通す鋭い目のことを示しています。主が教会の中におられるのですから、主は燃えるような火で、その妬むような愛で、私たちを見つめておられます。

2B 裁き主 15-16

¹⁵ その足は、炉で精錬された、光り輝く真鍮のようで、その声は大水のとどろきのようであった。¹⁶ また、右手に七つの星を持ち、口から鋭い両刃の剣が出ていて、顔は強く照り輝く太陽のようであった。

足の真鍮の姿は、はエゼキエル書 1 章にあるケルビムの姿、さらにその上に座す主ご自身の姿と重なります。主が地上に裁きを行われ、ことごとく諸勢力を制する姿であります。それから、大水のような音の声ですが、この方の威厳を示しています。御声が全地に鳴り響いていることを意味しています。先ほど読んだ詩篇 93 篇の続きには、こうあります。「93:3-4【主】よ川はとどろかせています。轟音を川はとどろかせています。激しい響きを川はとどろかせています。大水のとどろ

きにまさり力強い海の波にもまさって【主】は力に満ちておられます。いと高き所で。」これは、紅海が分かれた時、またヨルダン川をヨシュアたちが渡る時の事を指していると思われませんが、自然界にこのような形で主が介入されていることを思い出すだけでも、私たちの主の偉大さを思い出せます。主が語られる時に、このような力あるお姿を表しています。国々が騒ぎ、私たちもどうしても心が騒ぐこの世において、今こそ、主を見上げないといけませんね。

そして、「右手に七つの星を持」っておられるとあります。この七つの星は、七つの教会の御使いであると後で主が解き明かされますが、つまり教会をご自分の力ある手で握っておられるということです。私たちの教会も、主がこのように握っておられます。このことを認めつつ、私たちは礼拝を守っています。私たちが、この方に手に握られているということを意識しましょう。

そして、「口から鋭い両刃の剣が出ていて」います。これは、主ご自身の御言葉の強さです。剣にもいろいろな種類があります。ここのギリシア語では、「トラキア人が使った幅広く長い大剣」ということです。当時のギリシア系の人々が戦った時の武器で使われており、主が諸国の民に戦われる時に鋭い剣が出ている様子が描かれています(19:15)。主はこのような方なのですが、イザヤ書 49 章 2 節には、「主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私をかくまい、私を研ぎ澄まされた矢とし、主の矢筒の中に私を隠された。」とありました。地上におられたイエス様は、諸国の民を滅ぼす剣をその口に持っておられましたが、それを矢筒のようにして隠しておられたということです。へりくだる姿、思慮深さがここに表れています。

そして、「顔は強く照り輝く太陽」です。先に読んだ、イエス様の変貌の時にも太陽のような輝きがあったとありました。これが神ご自身の輝きであり、主ご自身の麗しさとも言えるでしょう。イエス様はマラキ書では、「義の太陽(4:2)」と呼ばれています。ですから、教会は燭台、御使いは星であります。イエス様は太陽であります。

3A 生きておられる主 17-20

このようにして栄光のお姿で現れたイエス様ですが、今度は、ご自身が確かに生きていと証言しておられるところに入ります。

1B 死に打ち勝たれた方 17-18

^{17a}この方を見たとき、私は死んだ者のように、その足もとに倒れ込んだ。

覚えていますね、ダニエル書 10 章で、主の使いがダニエルに現れた時に、ダニエルも気を失ってしまいました。このようにして、主ご自身に会うことは、圧倒的な聖なる方に会うことであり、心の奥底からへりくだり、ひれ伏すように導かれるのです。

^{17b}すると、その方は私の上に右手を置いて言われた。「恐れることはない。わたしは初めであり、終わりであり、¹⁸ 生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。また、死とよみの鍵を持っている。

主が右手を置いてくださっています。ダニエル書 10 章においても、御使いが触れて、立ち上がらせてくれました。そして、恐れることはない、と言われます。御使いはダニエルに、愛されている者よ、と呼びかけましたが、ここでも、主がヨハネを愛しておられることが伝わってきます。

そして主は、「わたしは初めであり、終わり」と言われます。これは、「初めから終わりまでである、一切合切」という意味です。イエス様が永遠なる方で、あらゆることに主権を持っておられ、あらゆることに関わっておられ、そして全てを動かしておられる支配者である、ということです。これが、どれだけヨハネを励ましたことでしょうか、そして私たちを励ますことでしょうか！

そして大事なイエス様の発言があります。「生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。」と言われます。教会において、復活の主が支配しておられることを知ることは大事です。主は、一度死なれましたが、よみがられ、そして今も生きておられます。ヨハネの時代には、イエス様が昇天されてから既に 60 年以上経っていて、イエス様は果たして生きているのか？という実感が湧かない状況だったのではないのでしょうか？そこで主が今も生きておられる方として現れてくださいました。主は、今の教会にも聖霊によって励ましを与えてくださいます。

それから、「死とよみの鍵を持っている」と言われます。死ぬことについて、また死後の陰府の世界について、主ご自身が全て掌握しておられるということです。これが教会の特色でしたね、「マタイ 16:18 そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」ですから、死は教会に何ら力を持っていません。恐れるべき方はゲヘナに投げ込むことのできる権威を持っておられる主であり、人はその魂に対して何もすることができない、ということです。これから、聖徒たちは死というものの直面しなければいけません。けれども、その恐れによって、イエス様の証しを曲げてはならないのです。ゆえに、主はご自身が死と陰府の鍵を持っていると言われたのです。主は、弟子たちに語られていました。「ルカ 12:4-5 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」

2B 三つの書き記すこと 19

¹⁹ それゆえ、あなたが見たこと、今あること、この後起ころうとしていることを書き記せ。

ここは、黙示録全体の構成を把握するのに、鍵となる重要聖句です。黙示録は、三つの部分に分けることができます。一つは、「あなたが見たこと」です。ヨハネは今、天におけるイエスさまの栄光の御姿を見ました。ですから、1章を、「あなたが見たこと」に区別できます。そして、「今あること」は、イエス様がこれからみことばを送られる、教会の事です。黙示録2章と3章に書かれています。この2章分を、「今あること」として区別できます。そして、教会のこの後に「この後起ころうとしていること」があります。4章1節をご覧ください。「ここに上れ。この後必ず起こることを、あなたに示そう。」とあります。今ある教会の後に起こること、教会が携挙された後に起こることが4章以降に書かれています。ですから、4章から最後の22章までを、「この後起ころうとしていること」として括ることができます。このアウトラインを頭に入れて、黙示録全体を読めば、19章後半に出てくるイエスさまの再臨がクライマックスであることを頭に入れて読めば、細部の表現にとらわれて、右往左往するのではなく、大きな流れとして黙示録を読むことができます。

3B 主の御手にある教会 20

²⁰ あなたがわたしの右手に見た七つの星と、七つの金の燭台の、秘められた意味について。七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。

イエス様自身が解き明かしてくださっていますが、七つの燭台が教会、そして七つの星が御使いです。ここの「御使い」について解釈が分かります。「使者」とも訳すことのできるため、ここを教会に立てられた指導者、牧者と解釈する人たちもいます。けれども、御使いを示している同じギリシア語が使われています。そして、黙示録の冒頭で、「1:1 イエス・キリストは、御使いを遣わして、これをしもベヨハネに告げられた。」とあります。そして、これから黙示録全体で、御使いが権威と力が与えられて、いろいろなことを行っていきます。ですから、教会に対するイエスの言葉を、そのまま普通に天使であると考えます。

2章と3章で、主は七つの教会それぞれに、御使いを介して語られます。生きておられる主が、その栄光の姿を持って語られます。もし、私たちの教会において、生きておられ、栄光に輝く主は、どのように私たちに語っておられるのでしょうか？御霊によって、何が語っておられるのかを聞いて行きましょう。